



佐渡の落日

復刊 88号

妙たえの光ひかり

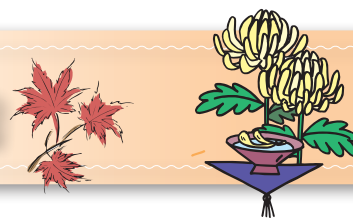
秋の海岸は、少し前までの海水浴客の喧騒が嘘のように静まり返り、打ち寄せる波の音しか聞こえない。角田浜から見る夕日は、夏の間目の前に広がる佐渡島に沈み、それが次第に左手に移動する。やがて島を離れて水平線上に沈むころには、さらに秋が深まり、海も荒れる日が多くなる。最も美しい夕焼けは、沈みきった太陽が空に点々と浮かぶ雲を輝かすときだ。空気がきりっと澄みきった、秋の日に限られる。西の空を中心に、空全体が鮮やかな黄金色に染まり、神々しいほどの色に包まれる。昔の人々が、西の彼方に仏様の住まわれる浄土があると考えたのは、当然のことだったろう。

そんな夕焼けは、一年に一度出会えればとても幸運と言えるほど少ない。そんなとき、寺から徒歩5分の海にカメラを持って走る。それでも最高のシャッターチャンスに出会うのはなかなか難しい。

落日の 秋潮荒し 日本海 野田ゆたか



行事案内



お彼岸中日法要 9月23日(火)祝

午前 10時30分 安穩廟法要
11時 秋季彼岸会中日法要(本堂)
12時 おとき(どなたも当日受付)
午後 1時 住職法話
※どなたでも、ゆつくりお参りいただけます。



えしき

お会式と第13回戒名授与式

10月19日(日)

●午前 9時 戒名授与者研修
● 11時 お会式、法号授与式
● 12時 おとき
●午後 1時 落語・三流亭楽々さん
※詳細は別紙案内をご覧ください。生前戒名のご案内は8ページです。

池上本門寺お会式団体参拝

●10月12日(日) 午後1:30 東京蒲田駅集合
午後8:50 同解散。
※詳細は別紙案内をご覧ください。

秋の1日研修 11月4日(火)・24日(月)祝

●11月4日(火) 初級者向け
午前9時～午後3時
●11月24日(月)祝 3回目以上の方
午前9時～午後3時
※詳細は8ページをご覧ください。



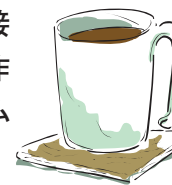
あとがき

お寺には毎日、『妙光寺版・終活ノート』の購入を希望する電話がかかってきています。今年は安穩廟25周年、毎夏の「送り盆」も25回目を迎えました。第1回は1990年、日本で最初の葬儀と墓に関するイベントでした。「終活」は近年の流行ですが、妙光寺では25年前から「終活」に取り組んできたわけです。「教えてお上人」のページは、今回は「妙光寺で行う葬儀」について詳しく説明しています。より詳しく知りたい方は、お寺にご相談ください。(新倉理恵子)

月例信行会

10月5日(日)、11月2日(日)、12月7日(日)

●毎月第1日曜日 朝7時～9時
●会費 千円(各自さい銭箱へお願いします)
※予約不要。当日お寺へ直接お越しください。お参り、法話、作務、朝粥の朝食とコーヒータイムがあります。



月例ボランテラ(毎月15日)

●午前9時～11時30分 午後1時～3時
主に清掃作業をお願いしています。都合の良い時間にお越しください。昼食はご持参願います。

『お寺でヨガ』

初心者向けのヨガ教室。予約制。

9月18日(木)

10月11日(土)・10月16日(木)

11月 8日(土)・11月13日(木)

12月13日(土)・12月18日(木)

◆(木) 14:00～15:15 ◆(土) 19:00～20:15

◆定員: 各15名 ◆費用: 一回700円

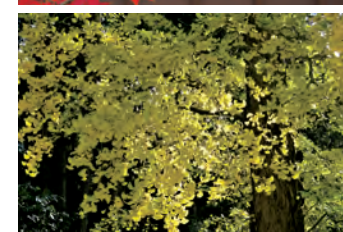
◆講師: ノリコさん

ヨガマット、もしくはバスタオルをお持ちください。木曜と土曜では時間が違いますのでご注意ください。



中野亘陶芸展 10月1日(水)～31日(金)

お馴染みの4年に1度の陶芸展が、4回目になります。今年は『京住院』を中心に、境内一帯を使って作品展示を行います。詳細は別紙ご案内を。





『妙光寺浄土基金』 小川英爾

『浄土』とは

浄土は一般的には美しい光景、妙な調べ、かぐわしい香り、おいしい食べ物、心地よい触感にあふれたところといわれます。

浄土で気持ちを整え、世の中の在り方を見直すと、すべての存在はつながりあっていること、「我」（自分のなかに中心となるものが居続けて、それが心を動かすという思い）というものはないことに気づく。すると、すべての執着から離れ、静かで満ち足りた心のやすらぎにつつまれると教えられています。



妙光寺はそんな安穩な心を育む浄土でありたいと、これまで沢山の方々のご協力をいただいて、本堂をはじめとする建物・境内環境の整備を続けてきました。近ごろは「境内も墓地もいつもきれいですね」「本堂や院庭で過ごしているととても落ち着く」「お参りすると元気がもらえる」など言われることが多く、思いがけないつつあるのかなと喜んでいます。

妙光寺の運営

こうしたお寺の運営は、檀信徒の皆さんからのお布施と寄付で成り立っています。住職はその中の宗教法人妙光寺からの月給で生計を立て、所得税を払い、さらに寺に家賃を払って住んでいます。あくまで宗教法人と住職個人は別という行政の指導に基づくものです。

お寺の維持管理費用については、安穩廟の収益を元にした『安穩基金』の運用益や、補修積立金で賄える体制を作り上げて来しました。ところが、諸行無常の教え通り、時代は変化していきます。リーマンショック以降、銀行利息が低いと同様に基金の運用益が下落しています。さらにここ数年、お布施収入の過半を占める法事が減少しています。このためお寺の通常運営費が厳しくなり、人件費はじめ経費を削減しつつ蓄えを取り崩している状況です。

そこへ、春先より客殿に雨漏りが見つかり、協議の末早急に張り替えることにしました。築33年を経て他にも痛みが出ています。また3年後に予定する新住

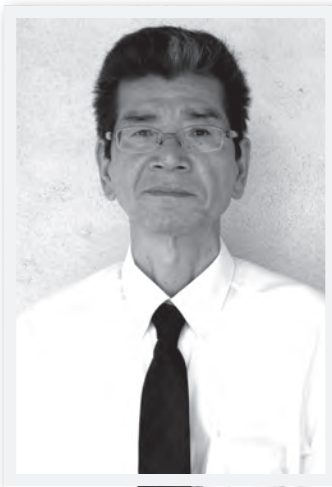
職の就任式と住居の問題もあり、役員会で相談を始めた矢先でした。これらの予想される出費に補修積立金と蓄えを放出すると、今後長期的に安定した寺院運営、維持管理の継続が困難となります。

『妙光寺浄土基金』

そこで、これまでの蓄えを元金に、檀信徒の皆さんに加え、安穩会員等幅広く妙光寺の活動に賛同していただける方々から随時の寄付をお願いし、新たに『妙光寺浄土基金』を設立する方策が役員会で決定されました。この基金がうまく回ってくれば、創建以来700年の歴史と、今後も末永い活動と景観を守り続ける支えにすることができます。

まずは檀信徒の皆さんに今後3年の間に、ご都合可能な協力をお願いをさせていただきましました。お陰様で日々に寄付申込書が届き感謝に耐えません。目安の10万円はあくまで平均額であり、寄付は任意です。住職以下全役員で様々な方法を検討し、そのうえでの苦渋の決断でした。併せてご理解いただければ幸いです。

石田省育さん



齊藤照彦さん



妙光寺ではこの春から、東京港区高輪の圓眞寺様と共催で、『法華経』の講座を行っている。これは、住職後継予定の良恵さんの勉強のためでもある。講師を宗教学者の正木晃先生にお願いし、会場の圓眞寺様には毎月女性も含めた若手僧侶が集まってくる。

齊藤照彦さんは、会社が圓眞寺様の近くだったのと、「前々からお経の意味を知りたいと思っていた」と初回から参加。齊藤さんは、旧姓を広野さんといい、京都に生まれた。外国航路の航海士だったが、船を降りて荷役会社に移り、職場で奥さんの鈴子さんと出会い結婚した。1年後の長男誕生の際、義父の齊藤高市さんに「二人娘の長女だから」と頼まれ、婿になり同居してきた。

義父の高市さんは妙光寺のある角田浜に生まれ、『法華経』の一部八巻を15回写経した信仰家だった。戦争で九死に一生を得て帰還し、左官職人として東京で暮らしてきた。実弟は縁有って得度し、佐賀県で住職も勤めた。

齊藤さんは、義父高市さんの影響でしだいに仏様の教えに関心を持ち、今は家族で毎日のお仏壇参りを欠かさない。昨年の『開創700年身延山法要』には孫や義妹夫婦も加え7人で参加した。

一方、石田省育さんは角田浜に生まれ、小学生の頃一家で東京に転居した。

父親の博さんは仕事の合間に都内の日蓮宗のお寺参りを続け、お経もしっかり読める人だった。その影響か長男の石田さんは、大学では商学部に進んだが、宗教や哲学に興味を持っていた。「本で読んだ宗教の知識でも、会社員時代は社内の人事管理に役立つことが多かった」という。

定年退職してからは時間ができ、お経を学べるならと講座に参加することにしたという。「専門的な言葉が多く、講義についていくのは大変です。でも先生の本を読んだりして、目からうろこのことも多く、幅広いお話に興味があります」と語る。

お二人とも直接のきっかけは、毎年ご前様が何うお盆の際に、この講座のことを聞いたのがご縁だった。実は齊藤さんと石田さんには共通の親戚があり、角田浜のそのお宅の法事等では顔を合わせる機会も幾度あった。学習会後の正木先生を囲む飲み会にも必ず参加して、若いお上人らとも打ち解け、気さくに語り合っている。（鎌田 記）

*講座は月1回で会費3千円。どなたでも参加できます。

信心

『法華経』講座に参加の二人

東京都

齊藤照彦さん(67歳)
石田省育さん(65歳)

「フェスティバル安穩」25周年

25回めぐつた妙光寺の夏を、井上治代さんとともに振り返る

毎年8月最後の土曜日に、妙光寺では「フェスティバル安穩」

（5年前からは「送り盆」と改称）という大きな行事を行ってきました。

「フェスティバル」は今年8月30日で、記念すべき25回目を迎えました。

第1回から「フェスティバル安穩」を妙光寺と共催してきたのが井上治代さんです。

井上さんとともに、25年の歴史を振り返ります。

一九八九年、井上治代さんが、「安穩廟」を始めた小川住職と出会う

一九八九年のある日、小川住職は大宮市の喫茶店で井上治代さん（現東洋大学教授）と待ち合わせをしました。井上さんは十年前に母を亡くしお墓を買おうとしたとき、自分は墓を購入しても継承していくことができないと知りました。井上さんが結婚して、姓が変わっていたからです。日本の古い「イエ制度」はなくなつたと思ひこんでいた井上さんが、初めて出会う「イエ制度」でした。それから数年、井上さんはお墓の問題を取材し続け「現代お墓事情」（一九九〇年3月出版）という本

をまとめようとしていました。そして「週刊朝日」の記事で妙光寺の安穩廟のことを知り、小川住職の話を聞くことにしたのです。

その頃の妙光寺は安穩廟をつくつた直後で、安穩会員はまだほとんどいませんでした。一方の井上さんは、檀家制度の中のお墓だけでは時代に合わないという確信を深めていたものの、具体的な展望は見出せていませんでした。井上さんは小川住職と話して「安穩廟は理想の墓の形」と確信しました。新しい葬送のあり方を探していた2人が期せずして出会つたところから、「フェスティバル安穩」は始

まりました。その頃の2人は、まだ30代でした。

一九九〇年夏「第1回フェスティバル安穩」は、葬送をテーマにした日本初のイベント

25年前の8月25・26日、「第1回フェスティバル安穩」が妙光寺で行われました。井上さんにとっては、数ヶ月前に立ち上げた市民団体「21世紀の結縁と墓を考える会」（縁21）の発足記念行事でもありました。井上さんは「縁21」東京事務所に参加申し込みを受け付けました。当日の参加者は約三百人、北海道や九州からもたくさんの人たちが妙光寺に集まりました。葬送をテーマに掲げた「第1回フェ



が行われ、井上さんと小川住職の他4人のゲストが各々の立場から発言しました。参加者からも活発な発言がありました。「散骨を行いたい」「子どもを頼らない墓をつくりたい」という一般参加者や、葬儀業界、石材店の人たちなど、葬送をめぐるすべての課題が共有されたイベントでした。

この時期、井上さんと小川住職のもとにはマスコミが殺到しました。一九九〇年の夏から秋にかけて井上さんが受けた取材は約70本、各地での講演も20回以上になります。小川住職も多くのマスコミ取材を受け、「ある種のパニック状態だった」と檀徒総代大滝剛さんは語っています。

「フェスティバル安穩」は、「墓（死）をとおして生を語り合う場

一九九九年までの「フェスティバル」は、一泊二日の日程で行いました。第2回のゲストは、樋口恵子さん（東京家政大学教授）です。60年代から家族のあり方について多くの発言をしてきた樋口さんは、第10回にもゲストとして参加しています。第4回は宗教学者の山折哲雄さん、第7回は映画監督の新藤兼人さん、第9回はノンフィクション作家の柳田邦男さんがゲストでした。各回のテーマも、「葬送の自由の声に仏教はどう応えるか」（第4回）、「人は家族以外に老後、死後を託せるか」（第5回）、「死を受け入れて生きるとは」

（第9回）など、20年後の今も問われ続けているものばかりです。「死を真正面から受け入れ、残された時をいかに有意義に生きるか、霧が晴れるような気分で作らせていただきました。」（第9回参加者の声）そして井上さんには「葬送と墓の問題を社会に発信できた手応え」がありました。

第11回（二〇〇〇年）新本堂上棟式を経て

二〇〇〇年の「フェスティバル」では新本堂上棟式が行われ、この年から現行の一日日程となりました。本堂の改築は、小川住職の悲願でした。改築によつて妙光寺には、本堂と回廊に囲まれた院庭と呼ぶ数百人が集える空間ができました。新しい空間の完成は、「フェスティバル」の形をおのずと変えていきました。それまでは、会場を移して行われていた交流パーティーが境内で行われるようになり、第13回（二〇〇二年）には、本堂に舞台を作つて、劇団希望舞台の演劇『釈迦内棺唄』が上演されました。院庭では、その後も様々な催しが行われています。

二〇一〇年「フェスティバル安穩」は「妙光寺の送り盆」へ

第21回（二〇一〇年）から、「フェスティバル安穩」は「妙光寺の送り盆」と名前をあらためて、新しい出発をしました。「送り盆」のイメージは、妙光寺という

名のひとつの村のお祭りです。従来と変わらない法要や院庭でのトークの他に、カフェや手作りコーナー、大道芸などを同時並行で行い、老若男女が集えるイベントになりました。

人々は「フェスティバル安穩」で新しい縁を結ぶ

「フェスティバル安穩」は、第一回から地縁・血縁に代わる、新しい縁の核になるつどいを目指してきました。初期の「フェスティバル」は、井上さんと小川住職、そして協力するジャーナリストや研究者が企画を考えました。当日は地元檀徒さんたちが設営をし、井上さんら「縁21」（二〇〇〇年7月「エンディングセンター」と改称）のボランティアが運営を担当し、全国から集まった僧侶たちが法要を行います。最初の頃の檀徒・ボランティア・僧侶の関係は、ややぎこちないものでした。終了後の打ち上げも、別々の部屋で行つたといいます。しかし、ともに汗を流していく中で、立場を超えた交流が生まれるようになりました。「小川さんの持ち味のどんな人とも分け隔てなく接する姿勢は、その中ですます磨かれていったと思う。フェスティバルという場が、小川さんを創つたんだよね。」井上さんは感慨深げです。

「フェスティバル」当日の運営スタッフは一〇〇人を超えますが、現在では終了

後の打ち上げも全員が大広間に集まって楽しく行います。スタッフの中には安穩会員も増え、檀徒でも会員でもないけれどもなんとなく妙光寺が好きだという人もたくさんいます。夏の妙光寺で連帯感が生まれ、新しい縁がたくさん結ばれたのです。井上さんも「25年を通じて、一生ものの仲間を得たことが何よりの財産。近年は次世代が参画してきたことを、力強く感じる。」と笑顔で語ってくれました。

「安穩廟の寺」から、「墓に入るまでの時間を充実させる寺」へ

「私の目標は、継承を必要としない墓を全国につくり、それが皆の当たり前の選択肢になることだった。それは実現したと思う。これからの妙光寺に期待することとは、寺が持つている『福祉』機能の復権だ。」と井上さんは言います。近年は人生の終点であるお墓だけでなく、人生を終える旅の行程に大きな関心が寄せられています。『妙光寺版・終活ノート』は、その答えの一つでした。井上さんは「仏教国では女性僧侶が、福祉の現場で非常に活躍している。次の住職の良恵さんには、女性の視点で新しい寺づくりをしていつてほしい。」と熱く期待を語ってくださいました。

*「フェスティバル」ボランティアスタッフは、随時募集しています。妙光寺にお声かけください。（編集部・新倉理恵子）



万灯のあかり ～妙光寺の送り盆～ (第25回フェスティバル安穩) 8月30日(土)



鈴木岩弓先生、小谷みどりさんと「住職トーク」。たくさんの人が耳を傾けました。



みんなを優しく見守る日蓮宗の守護神「七面様」



法要前、山門でお練りの行列を迎える住職と僧侶の皆さん。



350基の灯籠が、川面を彩りました。



全墓地に800基のあかりが静かに灯ります。



今年から始まったお茶席は大好評！



お天気に恵まれた境内に、出店が並びます。



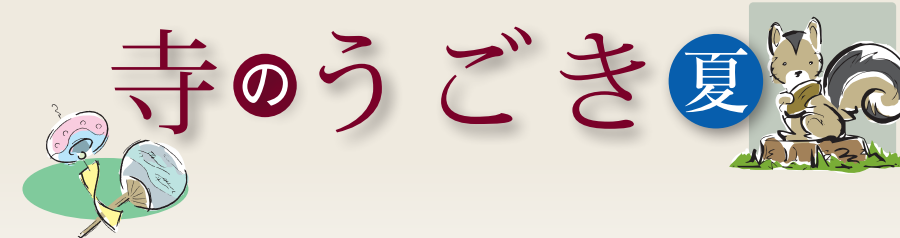
「フェスティバル安穩」25年間の歩みをパネルにしました。



交流会の締めは、角田の皆さんの「ときの声」。



「夜の交流会」はビールを片手に和気あいあい！



「妙光寺版 終活ノート」公開講座

7月27日(日)

(講師：星野哲さん、井上治代さん)



熱心に聴く皆さんに、関心の高さが伺えました。

岡野弘幹ライブ「祈りの心」 ～原爆の残り火を掲げて～ 7月28日(月)



岡野氏の奏でる音楽と日蓮宗声明師会僧侶の読経は見事。

岩屋七面様祭礼 8月19日(火)



岩屋での読経は、この世とあの世を繋ぎます。

お盆 施餓鬼法要 8月1日(金)



団扇太鼓で法要に参加する皆さん。

生前法号授与式 10月19日(日)

戒名とは仏様の弟子になった証ですから、生前に付けるのが本来の形です。戒名をいただいて、その後の人生を戒めるという意味もあります。日蓮宗では正式には法号と言います。妙光寺では毎年「お会式」に合わせて授与式を行い、20名前後の方が申し込みされます。

お名前と法号を金糸で刺繍した略式の袈裟と、数珠の記念品が付いて、費用は3万円です。ご希望の方は直接お問い合わせください。折り返し詳しい説明書と申込書をお届けします。締め切り10月5日(日)



お会式 10月19日(日)

日蓮聖人のご命日の法要を「お会式」といいます。10月13日がご命日ですが、それぞれのお寺の都合で日にちが変わります。

今年には法要のあと、日蓮宗になじみの深い落語で楽しみながら、江戸庶民の信仰に思いをはせていただきます。どなたでも誘い合わせてお参りください。(詳細別紙)

なお本年は、日蓮聖人ご入滅の地、池上本門寺のお会式に日帰り団体参拝します。(詳細別紙)

身延山街頭布教隊 来寺

総本山身延山久遠寺の布教隊が、佐渡への途次妙光寺に参拝し昼食を取ります。総勢30名の修行僧らで構成され、力強い読経とお題目は心に響きます。

10月20日(日)
昼12時過ぎの予定。一人でも多くの皆様にお迎えいただき、お参りにご参加戴きたく思っています。



秋の1日研修会

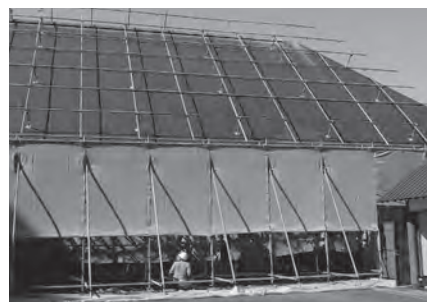
お経のこと、お参りの作法などを学ぶ日帰り研修です。堅苦しいことは一切ありません。どなたでもお一人でも気軽に参加いただけます。

初心者向け 11月4日(火)
3回目以上の方 11月24日(月・祭日) 午前9時〜午後3時 昼食付4千円 受付締め切り初心者向10月31日、3回目以上11月20日



インド仏遺参拝ツアー

これまでのご案内で予約多数につき残席が僅かです。至急お問合せください。
期日…2015年2月18日(水)〜
25日(水) 7泊8日 成田発着



ANA全日空利用、2人部屋1人28万円(含・燃油サーチャージ、ビザ他)、住職夫妻、添乗員同行します。総勢26名。妙光寺関係者だけの安心、安全、ゆつたりコースです。

屋根改修工事

客殿屋根に雨漏りが見つかり、放置できない状態です。9月1日から2か月間の予定で全面張り替え工事にかかりました。33年前の建替えのころ、物価高騰で費用が追いつかず材料も施工技術も不足だったことが原因です。

内部でも経年劣化の箇所があり、3年後の住職交代に向けた改修工事も予定しています。ご協力のほどお願い申し上げます。

誌上法話 小川英爾

「靈山への契約にこの判を参らせ候…」 (遠藤左衛門尉殿御書)

天国と極楽の違い

「亡き父もきっと天国から見守ってくれることと思います。」近ごろのテレビドラマで見る仏式の葬式の場面に、違和感を覚えます。天国はキリスト教信者の行く所だからです。仏式でいうならせめて「あの世から」とか、「仏様の世界から」でしょうし、「浄土から」ならば完璧です。

亡くなった仏教徒の行く先が浄土です。清らかで美しく、悩みや心配事の無い、穏やかな世界をいいます。一般的には「極楽浄土」が知られていますが、実は浄土は極楽だけではないのです。

日蓮宗は靈山浄土

冒頭の文章は、日蓮聖人が妙光寺と縁の深い五ヶ浜の遠藤家の先祖、遠藤正遠氏に遺されたお手紙の一節です。佐渡流罪の日蓮聖人を幕府の役人として見張る立場の遠藤氏が、信者となって仕えてくれたことへの礼状で、日蓮聖人が遠藤氏を靈山に案内する約束としてこの判(印鑑)を授けるという内容です。

この『靈山』とは、お釈迦様が『法華経』を説かれた靈鷲山というインドに実在する山をいいます。法華経信者にとって、お釈迦様が直に説法してくださる靈鷲山こそが浄土なので、この山を靈山浄土といいます。「鷲の形をした岩がある霊的な山」というわけです。

現在の靈鷲山は、ラージギルという町からほど近い緑あふれる景勝地で、世界各地の法華経信者が訪れる聖地です。息をのむような絶景と極楽のような楽しい世界か、と問われれば違います。

最近観光客ねらいの山賊も出るので、警官が同行すると聞きました。かなり以前ですが私はここに立って、2500年前のこの場所でお釈迦様が…、と想像するだけで空気も香しく、鳥の音が音楽に聞こえ、心が解きほだされる安らかな気持ちになりました。

この世を浄土に

日蓮聖人の鎌倉時代、また法華経信仰の盛んな江戸時代の人々に、インドの靈山浄土が想像できたとは思えません。日蓮聖人は「お釈迦様に代わり日蓮が法華経を説くこの身延山が靈山浄土」と言われました。しかし当時は身延山ですら、越後からは簡単に行ける所ではありません。その浄土はそれぞれの菩提寺であり、妙光寺だったようです。

浄土といえども、のんきに遊んで過ごす場所ではないのです。お釈迦様の説法を聞き、観音様始め多くの菩薩の支えを受けて、修行する所です。しかも実際には、どこかにあるという浄土は方便(仮りの姿)で、いま私たちが生きるこの場所を浄土にする努力と修行こそが、最も大切だとされるのです。

日常のしがらみや移ろいを忘れるほど真剣に修行し、ありがたいと思える人の繋がりをこの場所につくりあげることが浄土の姿です。

最近多くの若い僧侶が、災害地や世界の貧しい国で、人々を救済する活動を行って行っています。そうした活動も「浄仏国土、(清らかで仏様の住まわれるような国)をこの世に作る布教活動」なのです。

「妙光寺一大事?…」

法号は施食院!?

9月になりました。夏も終わり、過ごしやすい季節の到来ですね。夏の疲れを少しずつ回復させながら、清々しい実りの秋を楽しみたいものです。

夏の暑さの中でも会議や準備作業など、皆さんでごはんを食べる機会が多い毎日でした。恥ずかしながらいろいろな料理を作っては「実験だから食べて!」などと言うものだから、とうとう娘のリョウケイさんから「母さんの法号は施食院〇〇信女だね」と言われてしまいました。(〇〇というところがミソですね)

以前、旅行に行ったときすごくかわいいピンクの花模様の位牌を買ったので、そこに書いてもらうのが楽しみです。何事も、どんなに大変なことも、何かしら楽しみを見つけていこうと思う私は、ふざけているように見えるかもしれません。本人はいたってまじめなつもりですが…。

許す穏やかさを

最近、きちんと正しく見えることが王道のようで、人と違う個性は認められても、社会の空気に反

すると咎められたり、たった一人の大きな声にみんなが左右されてしまったりということが、多くなってきたように感じます。そのことが憂鬱です。うまく説明できないのですが、人間も社会も許容量が少なくて、みんなと同じでないと損をしたような気持ちになり、「少しくらいなら許そうよ!」という穏やかさが減ってきているように思えるのです。(写真の私の位牌も、かわいいねと言ってもらえても、位牌堂に安置してもらえるかどうか……)

役員の方々の熱意に感動

このたびの『浄土基金』のお願いですが、私自身としても本当に心苦しく思います。このような形でお寺を守れないのかと、無念な気持ちです。その一方で、長い間協議を重ねた役員の方々の「なんとしても、開創700年から次の100年へ…」という熱意に、驚きさえ覚えました。このような一大事が起きるたびに「寺とはなんぞや」と自問自答し、苦悩の日々が続きます。

でもとにかく心配はいりません。さまざまなご意見も、うかがっています。自分の気持ちで判断すればよいだけです。そのことでお寺側の対応が変わることもありません。

寄付というより、仏教用語の喜捨^{きしや}という言葉がふさわしいような気がします。喜びを持って修行をしていきたいものです。

質問

葬儀を妙光寺で行う際の、具体的な流れを教えてください。



深夜でも対応します

まず、お寺に電話連絡をください。深夜でもかまいません。お寺から葬儀社に連絡して、直ちに遺体のお迎えに向かいます。その際、予め搬送先がご自宅かお寺かを、決めておいてください。

関東はじめ県外からの搬送もできます。県外から搬送しても、参列者の

ご都合がつくなら、妙光寺での葬儀の方が安価です。

ご遺体到着後、枕経(枕元での読経)をあげ、そして住職を交えて葬儀の日程や規模の相談をします。その後関係者への通知、親族の細かな準備があります。通常はその夜が遺族だけの仮通夜で、翌日午後に納棺、引き続きお通夜となります。

安らかなお別れのために

ここまでの間にほんのひと時ですが、看病疲れの身体を休め、家族で語り合うことが大切です。境内の『京住院』は冷暖房に風呂、キッチンが完備して宿泊できます。さらに境内の四季折々の自然に囲まれ、心身が癒されることでしょう。

お通夜は『京住院』は25名まで、本堂なら120名まで着席可能です。通夜振舞いも準備できます。

葬儀当日の朝食はお寺でご用意します。9時から葬儀、10時出棺の日程

が多いようです。火葬場は巻、または青山斎場が選べます。火葬後お寺に戻り、繰上げ初七日、三十五日忌法要を行い、1時頃にお斎となります。

葬儀社はご希望があれば妙光寺指定の業者ですが、仕出し料理屋さんも含めてご希望の業者でもかまいません。互助会に加入の場合は、積立金を使って互助会葬儀社に依頼できます。

妙光寺は実費のみです

費用の目安は、先ごろお届けした『妙光寺終活ノート』解説版に詳しく載っています。セレモニーホール等を利用する場合の半額程度になります。妙光寺では、実費以外はいいただきません。また、ご事情で費用に不安がある場合は、葬儀のやり方を工夫することもできます。生前契約も含め、いつでもご相談ください。

檀徒の皆様は、安心して大切な方とお別れをしていただきたいと願っています。